

地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容：低所得者層団地の実践事例より

相戸，晴子
宮崎国際大学

<https://doi.org/10.15017/4763162>

出版情報：生活体験学習研究. 19, pp. 41-51, 2019-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容

— 低所得者層団地の実践事例より —

相 戸 晴 子*

Shifts in Life Behavior of Parents and Children Participating in Local Child-Rearing Support Programs

— The Case of a Low-Income Housing Complex —

Aito Haruko*

要旨 本稿は、低所得者層が多く暮らす団地の集会所で、月1回行われている子育て支援活動の2年9ヶ月の調査から、そこに継続して参加する1組の親子の生活行動の変容をとらえることを試みたケース・スタディである。そこでは、核家族化による孤立状況に加え、若年出産し、低所得世帯層の多い団地コミュニティ環境の中で子育てしている親たちが、団地内で行われる子育て支援活動に参加・参画していくことによって、人との関係を広げ、社会性を育み、わが子の接し方に変化が見られるなど、生活行動を変容させている一端をとらえることが出来た。また、子どもの生活行動は、親の生活行動の変容とともに、子どもの人との関わり、文化資本の広がりや深まりなどから、生活行動の変容の一端をみる事が出来た。

キーワード 低所得者層団地の子育て家庭、地域参加・参画、人との関わり、文化資本、行動変容

1. 問題意識

現代は、子育てや子育てが難しい時代だと言われている。例えば、家族形態の多様化、複雑化によりこれまでの子育て家庭の機能が維持しにくくなったり、人や地域との接点の減少により孤立の子育てに陥りやすくなったり、利便性や合理性を志向してきた生活スタイルの変容から、体験不足が生じてしまいやすくなったりしている。加えて近年では、「子どもの貧困問題」など、子育て家庭の経済的困窮やそこから起因する課題を抱える家庭の増加¹⁾も見られている。これらの課題に複合的に陥っている家庭は、子どもや親の生存や生活を脅かす状況に至ってしまうケースもある²⁾。

この状況で特に生活行動への影響をもたらしやすいのは、保護者のケアを受けながら成長・発達する乳幼児期の子どもたちである。この乳幼児期の子

どもたちへの支援においては、虐待等の生命の危険性から身を守られ、安心・安全に生存していくための発達支援とともに、同時に生きる主体として自立した生活を営んでいくために必要な教育支援も視野に入れていく必要がある。そのためには、子育てに困難を抱える家庭への個別支援という発想に留まるだけでなく、乳幼児に安心・安全な家庭や地域の環境が保障されているか、乳幼児期の子どもの育ちにふさわしい生活を家庭や地域で営まれているか、また、乳幼児期の子どもを育てる保護者のための学びの場が地域に保障されているかなど地域ぐるみの子育てや子育ての環境醸成を行っていくことが重要な鍵を握ると考える。

しかし、実際のところ複合的な子育て課題に陥っている家庭が、地域で行われている一般的な子育て支援事業へ積極的に参加することはそう多くない。

*宮崎国際大学

連絡先: 〒889-1605 宮崎市清武町加納丙1405番地 E-mail: haito@edu.miyazaki-mic.jp

多くの子育て支援事業を担当する担い手は「来て欲しい人（家庭の親）が来てくれない。」という課題³⁾を抱えている現状がある。

そこで、複合的な子育て問題を抱える家庭への支援については、親や子どもが自らの意思で参加したい、継続したいと思える活動であり、学習主体として参加出来る子育て支援事業が前提になければならない。今、求められているのは、親子が疎外から解放され、自ら地域との関わりを豊かにする主体となり、結果として生活行動を変容させていくという親子の主体形成を支える実践であり、それを実証していく研究ではないだろうか。

2. 本研究の目的と方法

そこで本研究では、低所得者層が多く暮らす団地の子育て家庭を対象に、団地敷地内の集会所を会場に地域の子育て支援事業を実施し、そこに継続して参加する親子の活動参加の様子から生活行動がどのように変容しているのかをとらえていく研究を試みる。

なお「生活行動」という用語は定義が広いため、本稿でとらえる「生活行動」とは、以下「表1」にある5つの視点を指標とする。

1つは、活動への参加の有無、参加した時間などの「参加状況」、2つは、活動に参加した際の服装や身なり、表情、ふるまい、態度、また一緒に参加した人の存在から見える「参加態度」、3つは、親同士、子ども同士、支援者との関わりなど「人と関わる様子」、4つは、その時々での活動での遊びや食、体験の活動など「活動内容に取り組む様子」、そして5つは、活動中に見られるわが子に対するまなざしや声掛けなどの「わが子への接し方」である。

表1 活動に参加する親子の生活をとらえるための生活行動の5つの視点

視 点	具体的内容
参加状況	(子どもの年齢)、参加の有無、一緒に参加した人の存在、参加した時間など
参加態度	服装や身なり、表情、ふるまい、態度など
人と関わる様子	親同士、支援者、他の子どもとの関わり様子など
活動に取り組む様子	遊びの活動、体験活動、ともに創る活動に取り組む様子など
わが子への接し方	まなざしや声掛けの様子など

研究の方法としては、この団地で行われているA団地子育てサロンに参加する親子の様子を記録した写真や動画、参与観察メモをもとに、生活行動の一側面をとらえてみたい。そして、その記録を前述した5つの視点から分析し、活動参加にみる「生活行動」がどのように変容しているのかについて分析を行う。

3. 低所得者団地の子育て家庭が直面している課題

A団地の子育て家庭が直面している課題とは何だろうか。長谷川(2014)⁴⁾らは低所得者集住地域の実態調査において、まず教育の課題があらわれやすいという特徴を指摘した。具体的には、親の中卒や高校中退、不登校経験から、わが子を学校に行かせないなど体験の分化が起こり、子どもの生活体験や学習体験の「不足」の積み重ねを引き起こすという悪循環が生じていること(福島, 2014)⁵⁾、また、教師や学校への不信感から、基本的生活習慣や学力に関心を持たない保護者が多い(山崎, 2014)⁶⁾傾向がみられると述べられていた。A団地においては小・中学生の不登校が多いことから、親も子も体験の分化や不足の積み重ねという問題意識を持たずに広がり浸透していくことから、負のスパイラルがA団地の教育課題をさらに複雑で困難なものにしていると思われる。

また久富(1993年)⁷⁾は、このような団地においては時代の流れに伴い、ある種の伝統的な「共同性」が解体することで、住民相互のコミュニケーションレベルの低下により、さらに生活困難層の地域ではさまざまな事件や問題を引き起こす「公営住宅のスラム化」状況が存在しやすいことを指摘した。一方、コミュニケーションは低下するにも関わらず、生活困難層の団地という狭い社会空間の中で他者との序列をつくるという階層化秩序というものが構造化されやすく、それでしか自分の存在意義を実感できない関係性、すなわち孤立を敵対するメカニズムとしての「うわさの階層構造」が生み出されやすい状況が生まれやすいことも指摘した。A団地においても入居者減少や隣人関係の希薄化に伴う自治会活動の困難な状況、悪いうわさがすぐに広がる状況などにより、子どもの育ちにおいて厳しい環境をみるこ

が出来る。

さらに、生活困難層の団地コミュニティネットワークの特徴として、「いびつな家族（親族）ネットワーク形成」の存在を指摘している。A 団地においても同じ団地に祖父母や子や孫といった血縁のつながりや親族と住み続けることによって、子育て家庭が家族以外との人々と接点をもたなくても生きていける状況が生まれたことから、まさに閉じられた関係性の中で癒着し、依存し合ういびつな子育てネットワークが形成されている状況を確認することが出来る。

これらの先行研究にみる低所得者層団地の子育て家庭は、社会との関係に支障をきたしている結果、子育て困難な生活に陥り、子どもの生活行動に影響を及ぼしているのではないかと考えられる。そこで、本研究ではその生活行動をとらえていくことを研究課題と位置づけ、低所得者層団地の子育て家庭の内実をあきらかにしていく研究を試みる。そして、最終的には子育て課題の多い家庭に社会との切片を創る実践を創造しながら支援のあり方や支援者の関わりについて考えていきたい。

4. 結果と考察 — 地域子育て支援活動参加にみる生活困窮家庭の親と子の生活行動について —

4-1 調査の概要とその調査実践について

本調査の実践は、「表1」に見られるように、もともと生活困窮家庭の子育て支援を研究するという「活動目的」で立ち上げられてきたものであり、立ち上げ時から調査実践として位置づけてきた経緯がある。具体的には、「活動名」はA 団地で原則月1回行われている「A 団地子育てサロン」であり、「調査の期間と回数」は、活動開始の2016年4月から2018年12月までの2年9ヶ月に行われた31回の活動を指す。「調査の時間」は月1回平日午前10時から12時の時間、それに加えて9時30分頃の準備から13時頃の約3時間30分を記録し分析を行ったものである。活動参加者26組のうち10回以上の参加がある家庭は6組あった。そのうち調査に協力すると了解が得られた家庭は3組あった。文字数の限界から本稿では、最も参加の多かった1組を事例として取り上げることとした。

表2 A 団地子育て支援活動の調査の概要とその調査実践について

項 目	内 容
活動名	A 団地子育てサロン
活動の目的	生活困窮家庭の子育て支援のあり方を研究するための実践。
調査の期間と回数	活動を開始した2016 (H28) 年4月から2018 (H30)年12月の2年9ヶ月に行われた31回。
調査の時間	活動時間である月1回平日午前10時から12時の活動から事前準備と後片付けの時間を含めた、9時15分から概ね13時までの観察。
調査の対象	低所得者層が暮らす大規模公営住宅団地で、乳幼児を育てている家庭の親と子（親以外の保護者の場合もあり）のうち、A 団地子育てサロンに参加したことのある26家庭のうち、10回以上の参加があり、調査協力の理解が得られた1家庭。
その他 (実践の場所)	A 団地敷地内の以下の施設 ・大規模公営団集会所（約20畳のホール、約12畳の和室、台所、トイレ） ・集会所前のグランド（約400平米）
その他 (実践の運営主体)	・団地住民（自治会役員、住民有志） ・子育て支援 NPO 団体のスタッフ（市地域子育て支援センター受託事業の位置づけ） ・研究者（専門：社会教育・生涯学習）
その他 (活動資金)	・自治会費 ・市事業費からの予算 ・寄付
その他 (多様な活動支援者)	・市民ボランティア（子育て支援、読書、人権のテーマなど） ・専門職（保健師、助産師、小児科医、元教諭や保育士） ・行政（保健師・社会教育関係者） ・研究者（専門：教育学）
その他 (主な活動の内容)	○遊ぶ活動 ・季節に応じた遊び、自由遊びなど ○子どもと大人の体験活動 ・子どもの文化に出会う体験活動（歌や音楽、制作活動、自然体験、食づくりなど） ・子育て文化に出会う体験活動（子どもとの関わり方、しかり方、向き合い方を共同で学びあう） ○人と出会い・語り・ともに創る活動 （親子自らが人に出会い、語り合い、活動を創っていく主体になる活動。）

その他、本調査実践の概要としては、「運営主体」が団地住民、子育て支援 NPO 関係者、研究者の3者による合同主体という特徴を持ち、「活動資金」も主にこの3者によって担われている。そこでは、市民ボランティア、専門職、行政、研究者など「多様な活動支援者」が関わり、遊ぶ活動、子どもと大人の体験活動、人との出会い・語り・ともに創る活動という「主な活動の内容」が取り組まれている。ま

た、毎月活動終了後は、運営主体や支援者による会議を行い、その日の活動のふりかえりや参加した親子についての状況整理、また次回の内容確認などに取り組み活動の充実を図っている。

4-2 倫理的配慮

なお本研究は、取り扱うテーマの性格上、家族の個人情報や生活状況に関する内容も含まれてしまうことがあることから、個人情報保護、プライバシー保護の観点から、地域や個人を特定する情報は載せないこと、また年齢なども大まかな区分での表記にするなど、研究全体を通して人権的配慮に基づいた表記や掲載を徹底する。

4-3 活動開始時の親子の状況

4-3-1 活動開始時の「親」の状況

調査を始めるにあたって、この活動に関わる主催者や支援者との協議の内容をもとに、A 団地で子育てをしている親や子どもが現在どのような状況があるのかを考え、「表3」のように活動開始時の「親」の状況を書き出し、20項目について分類をおこなった。そこでは、身なりや服装、言葉遣い、人への接し方など、「親の態度や気質」に関すること、睡眠や食事、後片付け、メディアとの接触状況など「親の生活習慣」に関すること、またわが子に対する叱り方など「わが子に対する接し方」、地域で子育てを応援するしくみとしての制度やボランティア活動といった地域資源である「親の子育て支援ネットワークとその活用」に関すること、また学歴や就労、結婚や出産といった「親を取り巻く状況」に関すること、5つのカテゴリーから子育ての生活状況の一面をとらえてみた。

本調査で事例として取り上げる親子は、2年9ヶ月に渡って取り組んできた活動実践全31回のうち、25回に渡って参加している20歳代前半の母親であり、2018年12月現在、3歳11ヶ月、3歳、2歳の子どもである。母親名は仮称で「母親：なな」と記す。また、「母親：なな」の子どもを「子A、子B、子C」と記す。

活動開始時の「母親：なな」に該当する状況を「表3」から選び、該当する項目に下線をつけた。ここでは、「親の態度や気質」にあるすべての項目、

表3 活動開始時の「親」の状況

■親の態度や気質など	
①	<u>ふてくされているような態度</u>
②	<u>疲れている様子の時が多い</u>
③	<u>言葉遣い乱暴な時がある</u>
④	<u>表情が乏しい</u>
⑤	<u>人を寄せ付けないような雰囲気</u>
■親の生活習慣について	
⑥	<u>朝や昼寝していることが多い</u>
⑦	<u>生活リズムの乱れ</u>
⑧	<u>食生活が乱れている可能性がある</u>
⑨	<u>片付けが苦手な様子が見受けられる</u>
■親のわが子に対する接し方	
⑩	<u>強い口調でしかることがある</u>
⑪	<u>まなざしがきつい時がある</u>
⑫	<u>育児放棄のような傾向</u>
⑬	<u>過保護・過干渉の傾向</u>
⑭	<u>身だしなみの乱れ</u>
■親の子育て支援ネットワークとその活用	
⑮	<u>親族や知人が頼れない、または頼らない。</u>
⑯	<u>子育て支援センターやファミリーサポート制度など地域の子育て支援を利用しない。</u>
■親を取り巻く状況	
⑰	<u>中卒や高校中退や不登校歴がある</u>
⑱	<u>希望する就労につけない</u>
⑲	<u>ひとり親、未婚、外国人</u>
⑳	<u>若年出産による子育て</u>

※下線の項目は「母親：なな」が該当する項目

「親のわが子に対する接し方」は⑩、「親の子育て支援ネットワークとその活動」すべての項目、「親を取り巻く状況」は⑰⑲に該当し、全20項目中10項目に該当している状況を伺うことが出来た。ここでは、活動開始時の「母親：なな」の態度や気質から、人との関係が円滑に取り結びにくい傾向が見られること、社会制度や地域社会とのつながりが少なく、若年出産でもあることから孤立の子育て状況に陥りやすい状況であることがわかった。

4-3-2 活動開始時の「子ども」の状況

親に続き、A 団地で暮らす乳幼児が現在どのような状況があるのか、「表4」では活動開始時の「子ども」の状況を書き出し、20項目の内容について分類分けをおこなった。そこでは、身なりや服装、言葉遣い、動作、人との関わりなど「子どもの態度や気質」に関すること、子どもの行動や言葉、身体発育など「子どもの発達」に関すること、また、睡眠、食、電子メディア接触など「子どもの生活習慣」に関すること、そして、保育所や幼稚園に行けない子

ども、子どもの文化に触れ合う機会がない、地域の活動に参加していないといった「子どもを取り巻く状況」に関することなど4つのカテゴリーから、子どもの生活状況の一面をみていくことが出来た。

表4 活動開始時の「子ども」の状況

■子の態度や気質など	
①	身なりや服装の乱れ
②	乱暴な言葉遣い
③	乱暴な動作（暴力行為）
④	<u>おもちゃなど極端に独り占めすることが多い</u>
⑤	<u>ちょっとしたことでかんしゃくを起こす</u>
⑥	<u>言う事を聞かないことが多い</u>
⑦	<u>極端に甘えたり、逆に甘えなかったりする</u>
⑧	目つきが鋭い
■子どもの発達に関する傾向	
⑨	落ち着きがなく他動傾向の様子が伺える
⑩	言葉の遅れ
⑪	身体の発育が遅いところが見受けられる
■子どもの生活習慣について	
⑫	朝や昼寝していることが多い
⑬	生活リズムが乱れている
⑭	食事をとっていないことがある
⑮	偏食の傾向が見られる
⑯	電子メディア漬けの生活
⑰	片付けが苦手な様子が見受けられる
■子どもを取り巻く状況	
⑱	<u>就学前施設に通っていない</u>
⑲	<u>子どもの文化（絵本や音楽など）に触れ合う機会が少 ない</u>
⑳	<u>地域の子ども支援の活動に参加していない</u>

※下線の項目は、「母親：なな」の「子A、子B、子C」が該当する項目

本事例で取り上げる「母親：なな」の子ども「子A、子B、子C」に該当する状況を「表4」から選び、該当する項目に下線をつけた。活動開始時の「子の態度や気質」は②④⑤⑥⑦、「子どもを取り巻く状況」はすべての項目があてはまると考え、全20項目中8項目が該当した。3人の子どもは、2歳、3歳、3歳11ヶ月とほぼ1歳違いの年子で生まれている状況がにより、年齢発達のひとくくりにすることが出来ないが、ここでは活動開始時に出生していた子Aと子Bの様子について、言葉遣い、おもちゃの使い方、怒る態度、聞く態度、甘える態度について問題行動と思われる内容が含まれていたこと、また子どもを取り巻く環境は、主に親や家庭の判断で、就学前施設に通わず、子どもの文化体験に触れ合う機会が少なく、地域の子育て支援活動にも参加していない状況であることから、子どもが日常

的に親以外の人との関わりが極端に少ないという課題をみることが出来る。

4-4 活動に参加する親子の生活行動

「表5」は、2016年7月から2018年12月の2年5ヶ月に渡って団地の子育て支援活動に参加した「母親：なな」と「子ども」の様子を記録した一覧である。ここでは、参加開始時の子どもは2人であるため子A、Bとし、途中で3人目を出産した後は、子Cと表記している。

「参加状況」については、活動が始まった2016年の4～6月は参加せず、7月から参加していること、且つ遅れて参加することが続いていたことから、最初は不安や戸惑いが大きく気後れして出足が遅くなっていた様子が伺える。一方、行き始めて半年が経過した2017年の1月頃からは徐々に開始時間に間に合うように参加し始め、休まず参加する状況に変わってきた。

次に「参加態度」をみると、初参加の7月は時間も遅れての参加であったが、集会所に入れなかった様子から、参加した時間にもあらわれていたように活動参加の初めの一步はかなり不安やためらいがあったことが伺えた。また、参加態度に記録されていたいつも一緒に参加、不参加をしていた先輩の存在が、2017年8月以降はそれぞれ別行動をしていることがわかる。ここでは、二人の間に何があったのか、なかったのかはわからないが、二人は団地での唯一の子育て仲間と言っていたことから、この別行動は親同士や子ども同士の関係についても大きな影響をもたらした出来事だったことは確かである。ちなみに、2018年2月を最後に、先輩は活動参加をしていない。2018年12月現在まで10ヶ月不参加の状態が続いていることから、先輩については活動に参加出来ない、またはしたくない状態が続いていることがわかる。一方、「母親：なな」の様子からは、先輩がいるとき、いない時、また別行動を始めた時など、会場で一人で過ごすことが多かったことから、気軽に会話が交わせる人の存在が出来るまで1年近くの年月が必要だったことがわかった。そして「母親：なな」は、2017年8月前後を境に活動で顔見知りになった子育て仲と話が出来るようになるなど先輩以外の母親との関係に広がりが見られたり、支援

表5 活動に参加する「母親：なな」と「子A、B、C」の様子

年月	生活行動をとらえる5つの視点				
	参加状況	参加態度	人と関わる様子	活動に取り組む様子	わが子への接し方
2016年 7月 9月 10月	○参加 子A：1歳6～9ヶ月 子B：0歳7～10ヶ月 ・11時頃からの参加。	・長髪、半袖、短パン。 ・表情に喜怒哀楽を出さない。 ・仲良しの先輩と参加。 ・2人して集会室になかなか入らない。	・口数が少なく、一緒に来た先輩の側を離れず、見知らぬ支援者を警戒し、周囲と距離を置いているような雰囲気。	・子どもの水遊びを楽しむ。 ・ベビーマッサージを誘ったがしなかった。 ・読み聞かせは親も子も背を向け関心を示さなかった。	・喜怒哀楽や表情をほとんど出さず、言葉掛けもほぼなかった。
8月	×不参加（先輩も不参加。）				
11月	○参加 子A：1歳10ヶ月 子B：0歳11ヶ月 (子C：妊娠臨月) ・送迎車に時間通り乗車。	・長髪束ね、上下ジャージ。 ・表情に喜怒哀楽を出さない。 ・初めて先輩いなくても参加。 ・孤立しているような様子。 ・(市社会教育施設での活動)	・一人で子A、Bの体験や食事を世話し、周囲に助けを求めない様子。	・表情は少ないものの、バスハイクで訪問した自然体験を行う施設では、子どもに芋掘り体験をさせるため、子Bを抱っこしたり、スコップを持たせたりしていた。	・慣れない場所で緊張しているせい子A、Bは、親の側を離れなかったが、「母親：なな」は、言葉をかける姿はほとんど見られなかったものの、そばに続けることをいやがることはなかった。
12月	×不参加（出産のため不参加。先輩も不参加）				
2017年 1月 2月 3月 4月	○参加 子A：2歳～2歳3ヶ月 子B：1歳1～4ヶ月 子C：0歳1～4ヶ月 ・10時過ぎから12時過ぎまで参加。	・長髪束ね、パーカー、ズボン。 ・少しずつ喜怒哀楽の表情が。 ・仲良しの先輩と参加。(2月のみ先輩不参加。) ・先輩の側に親子で座る。	・支援者からの子どもC出産お祝いの言葉を照れながら喜ぶ。 ・徐々に子どもCを支援者が抱っこするのを嫌がらなくなった。 ・先輩が出産時が病院まで連れて行ってくれたエピソードを話した。	・支援者の遊び「坊主めくり」に先輩と付き合う姿。	・子Cの世話をしつつ、子A、Bに目配り、気配りしている様子。
5月	○参加 子A：2歳4ヶ月 子B：1歳5ヶ月 子C：0歳5ヶ月	・長髪、長袖シャツ、ジーンズ。 ・少しずつ喜怒哀楽の表情が。 ・先輩は遅れて参加。	・他の親との交流は相変わらず少ない。 ・先輩の側にいない時間あり。	・子Aが砂遊びを楽しむ。 ・読み聞かせは、子Aは見えていたが親が背を向けていた。	・子Bを肩車して遊ぶ姿。
6～7月	×開催なし（自治会の事情でサロンが開催出来ず）				
8月 ～ 2018年 3月	○参加 子A：2歳7ヶ月 ～3歳2ヶ月 子B：1歳8ヶ月 ～2歳3ヶ月 子C：0歳8ヶ月 ～1歳3ヶ月 ・10時から12時30分まで残って参加。	・長髪束ね、Tシャツ、ジーンズ（破れ模様） ・喜怒哀楽の表情が増える。 ・2017年8月から12月、そして2月までは先輩は参加したが別行動。 ・先輩がいる日はあえて遠い会場の隅に座ることが多い。	・子は少しずつ母親にべったりがなくなる。 ・母親は安心して支援者に託している様子が見られた。 ・特定の母親ではあるが、話しかけられると笑顔で談笑する場面も。 ・徐々に先輩以外の特定の母親と一緒に過ごす時間が増えてきた。	・2017年11月以降、子Aが読み聞かせを一番前で聞き始めた。 ・2017年12月、初めてベビーマッサージに取り組んだ。 ・2017年12月以降、食の活動にも親子で熱心に取り組み始める。	・子Cを支援者が抱いてくれるので、子A、Bの目配りや気配りに専念している様子。 ・たまに子Bがそばにきたら抱きよせる様子があった。
4～12月	○参加 子A：3歳3～11ヶ月 子B：2歳4ヶ月～3歳 子C：1歳4ヶ月～2歳 ・10時前から来る日が増え、帰りは12時30分まで残って参加。	・長髪束ね、Tシャツ、ジーンズ ・2018年3月から11月まで先輩不参加。 ・2018年5月から子A、B、Cの服装・身なりが整う。 ・リラックスした態度の喜怒哀楽の表情が増える。	・4月の「話し合い」を行う事前に疑問点を訴える。 ・8月の活動で受付を担ってくれた、お礼を言う笑顔を見せた。 ・7月は保健師、11月には大学教員と談笑する姿が見られた。 ・12月「パルーンアート」を提案し、照れながら講師を務めた。	・読み聞かせを親子で注目するようになり、子Aは正座して一番前で聞く姿があった。 ・2018年8月、そうめん流しを親子で楽しむ姿があったが、子Aは、お箸を正しく持つことが出来ていなかった。	・子Bがおもちゃの取り扱いに大声で泣く場面が見られ、時々親が少し大きな声でなだめる姿がある。 ・2018年7月のカレー作りでは子Aが野菜を切る時、親と一緒に手を添えて切っている様子が見られた。

者や専門職との会話についても穏やかな表情で話が出来るといった態度に変わったり、また、人との関わりが円滑に穏やかに出来る生活行動の変化の一端をみることが出来た。

次に「人と関わる様子」については、活動参加の4～5ヶ月は、口数が少なく、先輩のそばを離れず、支援者を警戒し、先輩以外の周囲の人に距離を置き、近づけないような雰囲気をかもし出していた様子が伺える。また、子どもの世話に追われても、支援者が抱くことを嫌がり、ベビーマッサージなどの誘いも拒否することが多かった。少し変化が見られたのは、2016年12月に子どもCが誕生し、3人の子どもの母親になった1月の活動の頃からである。誕生後1月もたたない2017年1月の活動では、生後1ヶ月未満にも関わらず活動に参加し、支援者や周りの親たちに、「おめでとう」や「抱っこしたい」と次々言われることに、戸惑いながらも、笑顔を見せ、支援者の数人に子どもを抱かせる様子が見られた。「母親：なな」は、その後徐々に3人の子どもを抱くことを受け入れていくようになった。このように、時間は掛かり、少しずつの変化ではあるものの、頑なに拒絶したり、人を近づけなかったりする態度が減ってくる様子を見ることが出来た。また、特筆すべき様子として、2018年4月の活動では、この活動の事業計画を立てる「話し合い」活動を行った。話し合いに参加した6人の親たちの前では意見や感想を述べることはなかったが、活動に対する疑問やこれからの活動について支援スタッフに連絡を取り、活動したいことを「伝える」という行動を起こしている姿を見ることが出来た。具体的には「親子で参加する活動なのに子どもだけ参加させる家庭があるけど、それっていいんですか？それ認めると、みんな親は来ないでいいって思いますよ？」など、クレームのような意見ではあった。しかし、ここでは、「母親：なな」が自分の考えを伝えることによって、支援者がそれを話し合いの議題にあげ、みんなで参加のルールについて話し合いをし、みんなでルールを作っていくという活動を行うことが出来た。「母親：なな」は、「話し合い」の活動を通して、自分がその話し合いに構成する一人であり、対等で自由に意見を交し合える、すなわち民主的な会議の一場面に出会う経験をする事が出来ていたと考えられ

る。そして、その話し合いの場で自分の問題意識をみんなで話し合った経験から、自身の存在意義、かけがえのない大切な存在であることを実感したのではないだろうか。この後の活動では、10時の開始前から集会所に来るようになり、2018年8月は忙しいスタッフに代わって受付の役割を担当し、わが子をみながら必死に役割を全うしようとする姿が見られるようになった。その後支援者からの感謝や労いの言葉に、当初表情がまったくなかったとは思えないような、照れながらも笑顔を見せる姿があった。また、役割を担うということでは、クリスマス会の活動にもそのエピソードがある。2018年11月の活動の最後に来月の日程と内容を確認していく中で、あらかじめ決まっていたクリスマス会の活動内容に、「母親：なな」から「バルーンアート」の活動を加えたいとの発言がなされた。「母親：なな」は、少し作った経験があるとの話も出したことから、「母親：なな」が「バルーンアート」の中心を担う担当として、その遊びを行っていくことになった。翌12月の活動では、開始1時間前に「母親：なな」は集会室に現れ、会場設営から風船の準備など一緒に取り組む姿があった。ここでは、「母親：なな」は、活動に参加し始めた頃、10歳代後半という若年の親として大人への不信感や他人への疎外感を持っていた様子が見受けられていたが、子どもとともに2年9ヶ月に渡って継続した活動に取り組んできたことにより、自分を応援したり受け止めてくれる人々、また苦楽をともにしている子育て仲間との存在に気づき、徐々に自分を表現したり、行動を起こすことが出来ていったのではないかと考える。

次に「活動に取り組む様子」では、全体を通して、人との関わりに苦手意識があり、人と一緒に行動したり、作ったりすることが苦手で、一人またはわが子や先輩親子という特定の人に関わりを持つことが出来なかった、いやしなかった様子が見受けられる。しかし、徐々に、支援者に心を開いていく時期が訪れ、支援者が誘った遊びと一緒に付き合って遊んだりする協調的な行動を見ることが出来た。また、読み聞かせや音楽といった子どもの文化に関する活動への興味関心の広がりが見られた。2016年10月には親子で、2017年度5月頃まで「母親：なな」はまったく見向きもしなかった絵本について、

2017年11月以降、活動において読み聞かせに注目する姿が多く見られるようになった。そこでは、子どもAが一番前で熱心に聞く姿を頻繁に目にするようになって「母親：なな」も子どもの文化の魅力に気づいたのではないだろうか。

しかし、食の活動では、子どもAがお箸をうまく使えないなど、生活スキルが十分に獲得出来ていないという状況も見受けられ、活動に参加しても吸収出来ることばかりではなく、内容によっては吸収が難しいと思われることもあることがわかった。

最後は、「わが子への接し方」についてである。ここでは、活動参加当初、活動への不安や緊張感の影響もあってが、わが子への接し方において、喜怒哀楽などの表情はなく、言葉を掛けている様子もほとんど見受けられなかった。しかし、活動に参加して10ヶ月が経過した2017年5月には、子どもCを支援者に抱いてもらい、子どもAが友だちと遊べる状況があったとき、近づいてきた子どもBを抱き上げ、肩車をしてにこやかに遊ぶ親子の様子が見受けられた。この頃には、「母親：なな」は活動参加の様子に緊張した面持ちが消え、リラックスした表情が増えている様子があった。また、「母親：なな」の表情と比例するように、3人の子どもの表情からも過度な緊張の面持ちがなくなり、安心して素の自分を出すような場面が見られるようになった。2018年の秋には、子どもBが自己主張できる年齢となり、おもちゃの取り合いで泣き叫んだり、けんかをしたりする状況が始まっていたが、「母親：なな」においても、子どもの状況に応じて声を出して子どもを叱ったりなだめたりするなど、試行錯誤しながらも子どもの反抗期に付き合う姿も見受けられた。

5. 総合考察 — 地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容 —

以上、2年9ヶ月に及ぶ地域の子育て支援活動に参加する親子について記録し、生活行動の変容をとらえることを試みてきた。

そこで、「表5」で示した5つの視点による生活行動の記録の結果をもとに、2年9ヶ月に及ぶ「母親：なな」と3人の子どもの「子A、子B、子C」の生活行動がどのように変容してきたのかについて総合考察を試みる。

5-1 参加状況からみえた生活行動の変容

「参加状況」については、2016年の事業を開始した4月から3ヶ月間は自治会からお誘いがあったにも関わらず興味を示さず参加を拒んでいた。しかし、同年7月から4ヶ月に渡って、10時の開始時間には間に合わないことが多かったものの、参加することが多くなった。その時点では主体的参加というよりは、もともと人との関係が円滑に切り結べない「母親：なな」にとって、唯一仲良くしていた先輩の存在があったこと、また、団地敷地内で取り組まれることから親子が楽しそうに参加する様子を遠めに見ていたこと、そして、活動の様子をSNSで紹介したり、繰り返し団地内でお誘いの声掛けをする団地役員と会話する機会が増えたりすることによって、活動参加の初めの一歩を踏み出す勇気を得たり、後押しになっていたと考えられる。その後は、第3子出産を経て5ヶ月に渡ってほぼ10時の開始時間から12時過ぎの活動時間いっぱい毎月積極的に参加する姿があった。その後2ヶ月の主催者である自治会事情により開催出来なかった時期があったものの、2017年8月から8ヶ月間の活動では10時の開始時間から12時終了後も子どもが遊び続けていたこともあり、活動終了後も残って参加する姿が見受けられた。そして2018年4月から現在に至る9ヶ月間においては、開始時間10時前から12時半まで参加するようになった。そこでは、開始前の会場設営や受付名簿を付けるなど運営に関わる姿が見られた。すなわち、「不参加（2016年4月～6月）3ヶ月→客体的参加（2016年7月～12月）6ヶ月→主体的参加（2017年1月～2018年3月）14ヶ月→主体的参画（2018年4月～2018年12月現在に至る）9ヶ月～」という参加状況にみる生活行動の変容をみるが出来た。

5-2 参加態度からみえた生活行動の変容

次に「参加態度」においては、服装や身なりの面から考察してみたい。この2年9ヶ月で「母親：なな」の服装や身なりは長髪を束ねるなど清潔感が増したという変容に留まった。しかし、前述した「参加状況」が主体的参加以降になると、「子A、子B、子C」にお揃いの洋服を着せたり、お揃いのお団子ヘアの髪型にしたりするなど活動参加に向けた子ども

の身なりを整える時間や行動、投資が増えている様子をみることが出来た。そこには、支援者による「可愛いね。綺麗に結んでもらったね。」という親子への声掛けや参加する他の親子からの声掛け、また「子A.子B.子C」自らが「可愛いでしょ。ママに結んでもらった。」などを支援者や参加する他の親子に見せたり話したりする姿が見られるようになってきたことが、「母親：なな」にとって、3人の子育てで忙しいながらも、時間を掛けて身なりを整えた自分をほめてもらって嬉しい気持ちになったり、わが子がより愛おしく思えたりしていった結果、生活行動が変容していったと考えられる。そこには、表情、ふるまい、態度が、服装や身なりの側面だけからとらえても、行動変容していることが伺える。

しかし、ここでは「一緒に参加した人の存在」すなわち、仲良しの先輩という特定の人間関係しか取り結べなかった「母親：なな」が、先輩との距離、葛藤、孤独を経て、新たな出会いや交流という、長い時間を経て、人との関係構築による参加態度にも着目していく必要がある。ここでは、人との関係がうまくいかないことによる不安、不信の時期を経て、少しずつ安心、自信に向かっていく生活行動への変容を遂げることが出来ていた。見方を変えれば「母親：なな」がこの子育て支援活動の参加を通して、支援者や参加者と子どもの身なりを整える自分、また人間関係構築に葛藤している自分を承認や受容してもらえ体験、またわが子の喜ぶ姿に勇気もらい、それら参加態度の生活行動の変容をみることが出来たと考える。

5-3 人と関わる様子からみえた生活行動の変容

次に「人と関わる様子」の考察である。ここでも主体的参加をし始めた頃から、わが子を抱っこしてもらうことを嫌がらなくなったり、特定の人にしか心を開かなかった傾向の「母親：なな」が、徐々に参加する親子と談笑したり、一緒に過ごすことが出来るなど、特定の人だけではない関係性の広がりや深まりをみることが出来た。また、主体的参画期では、活動参加者で自分たちの活動について話し合いに取り組んだ際、最初から自分の意見をみんなの前で述べるということは出来なかったものの、普段から自分が疑問に思っていることを支援者に直接訴え

る行動を起こしていた。そこには、「母親：なな」が2年以上の活動参加を経て、自分もその活動をつくる一人であるという意識が芽生えていたと考えることが出来る。そこで、よりこの活動をよくしていきたい、もしくは問題点は改善していきたいという問題意識が芽生えていったと考えられる。話し合いでは発言こそ出来なかったが、2年9ヶ月目に取り組んだクリスマス会の前月には、自らバルーンアートを行う提案を活動中に発言し、当日は、特に早く会場に来て、バルーンを膨らませたり、見本を作ったりと講師的な役割、その事業を担当する主催としての役割を誠実に担っている姿をみることが出来た。すなわち、主体的参加を始めた「母親：なな」は自ら活動の主体者でありことを自覚していき、調査後半のクリスマス会では自ら役割を担う主体に行動変容していたのである。

5-4 活動に取り組む様子からみえた生活行動の変容

次に「活動に取り組む様子」からの考察である。

活動開始前は、「子どもを取り巻く状況」でも把握したように、家庭環境において日常的に子どもにふさわしい文化資本が十分ではない状況に陥っていた。団地では就学前施設に行っていない子どもが多く、「母親：なな」の子どもたちも文化的な活動に触れている状況ではなかった。しかし、毎月1回の活動の2年9ヶ月の活動に継続して参加していく中で、例えば、水遊びや砂遊び、また団地外に出掛けて体験した芋ほり、毎月取り組んだ食べ物作り（軽食やおやつ）、かるた（坊主めくり）やお正月遊び、ハロウィンパーティ（収穫祭）やクリスマス会、雛祭りなどの季節の行事、伝統文化、絵本や音楽活動など、子どもの年齢発達に即した文化活動に継続して出会わせていくことを可能にし、活動を楽しむ様子、道具の使い方を獲得している様子、遊び方を習得している様子、食を作るスキルの獲得、手作りする楽しさや美味しさの実感、絵本や音楽遊びを聞く姿勢や楽しむ様子から、徐々に子どもの生活に文化活動が取り入れられ、その活動をたしなむ生活行動の変容、すなわち活動の意味理解、接し方、楽しみ方、作り方、必要な知識や技能の獲得につながっている行動変容をみることが出来た。

5-5 参加態度からみえた生活行動の変容

最後に「わが子への接し方」についての考察を行う。ここでは、活動参加時にわが子に対して、声掛けやまなざしが乏しかった「母親：なな」が、客体的参加から主体的参加への移行の時期に、氷を溶かすかのようにわが子への関わり方の生活行動への変容をみることが出来た。そこでは、誕生したばかりの「子C」の世話をしつつ、「子A.子B」への目配り、気配りをしたり、支援者に「子A.子C」を見てもらっている間、「子B」を肩車して遊んだり、抱き寄せたりする関わりをみることが出来た。ここでは、客体的参加の時期は、人も場所にも慣れておらず自分が活動に存在する意義を見出せないことから緊張感や疎外を感じ、わが子への接し方も冷たい行動が見られていたとするならば、徐々に、人や場に慣れ、「母親：なな」が周囲の人との関係構築が深まっていったことにより、緊張がほぐれ、自分自身を疎外から解放させ、わが子を慈しむようなまなざしや声掛け、また、ふるまいが変容していったと考えられる。もちろん、子どもの年齢発達段階で反抗期や人見知りなど、状況に応じて大きな声でなだめるなどの接し方も見られるがそれも含めて、わが子に対する発達に応じた接し方が出来てきた生活行動の変容とみることが出来る。

以上の考察より、本研究で取り上げた低所得者層団地で取り組まれている地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容を総合考察すると、不参加だった親子が参加する契機を経たことが、最も大切であったことがわかる。そして、そこからはじめの一步を踏み出した親子は、客体的参加に留まっていた時期に人との出会いや交流といった関わり方の広がりや深まりを通して、自身が承認されたり受容されたりしていること実感するようになり、徐々に自分の態度を変容させていくことにつながっていた。そしてそれを実感した親は、より積極的に活動に参加したり取り組んだりするようになっていった。そして主体的参加が定着していった、その親は活動の主体者としての意識が芽生え、その場に対する問題意識が芽生えたり、その活動の主体者としての生活行動をふるまう生活行動の変容をみたりすることが出来ていた。

おわりに

本研究を終えて、2つの研究課題を記しておきたい。

一つは、地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容というタイトルにも関わらず親の生活行動の変容が中心になってしまったことである。しかし、あえて親の生活行動の変容と焦点化したテーマにしなかったのは、一例として親が子どもの文化活動への理解することが子どもの生活行動の変容にもつながっている側面を垣間見ることが出来たからである。本稿では、それを十分論じることが出来なかったが、今後はいかにその親と子どもの両方への生活行動の変容をとらえ論じていくことを課題とした。

もう一つは、地域の子育て支援活動に参加する親子の生活行動の変容の考察が、低所得者層団地の事例にみる特徴を明確に提起出来なかったことである。そこには、安直に違うところを強調して抽出することにより、普遍的に大切な生活行動の変容のプロセスを見落としてしまうことになるのではないかという思いがあったからである。しかし現在、子どもの貧困問題などが大きな社会問題となる中、低所得者層団地の事例に必要な子育て支援を検討していくためには、その側面からもとらえていく必要があると考える。しかし、本稿ではその両面を整理して提示するところまでは到達しなかった。

今後は、これらの研究課題も視野に入れながら研究活動を継続していきたい。

注

- 1) 朝日新聞、2015年4月3日朝刊に、1985年の子どもの貧困率10.9%から2012年は過去最悪の16.3%となり、およそ子どもの6人に1人が貧困という結果が発表された。
- 2) 宮崎日日新聞社「だれも知らない」取材班『だれも知らない—みやざき子どもの貧困』宮崎文化情報センター、2015年。
- 3) 拙著者がこれまで担当している地域子育て支援センター事業等のスタッフ研修において常に多い課題の一つにある。
- 4) 長谷川裕編『格差社会における家族の生活子育て・教育と新たな困難—低所得者集住地域の実態調査から』旬報社、2014年。
- 5) 福島裕敏「IV-3 親からみた子どもの教師・学校体験」pp.284-323、長谷川裕編『格差社会における家族の生活子育て・教育と新たな困難—低所得者集住地域の実態

調査から』旬報社、2014年。

- 6) 山崎鎮親「IV－4 教師からみる子どもたちの学校体験：「他者化」の視線を中心に」pp.324-362、長谷川裕編『格差社会における家族の生活子育て・教育と新たな困難

— 低所得者集住地域の実態調査から』旬報社、2014年。

- 7) 久富善之編『豊かさの底辺に生きる — 学校システムと弱者の再生産』青木書店、1993年。